

著者と
1時間



ガラスの魅力を一気通貫で

1894年、長崎で創業し、現在は東京、兵庫、九州を中心にガラス販売・施工を手掛けるタナチャー。同社の田中廣社長は「ガラスは人智を結集してこれまで進化してきた。機能的にも優れているこのような面白い建材は存在しない」と語る。このほど太古の昔からその美しさにより人々を魅了してきたガラスの歴史を1冊にまとめた。田中社長に本書に込める思いを聞いた。

田中社長は1992年に入社後、94年に同社が創業100周年の節目を迎え設置された記念誌を編纂するチームに参加した。記念誌ではガラスの歴史を掲載することになった。大学時代は経済史を専攻していたため、「全くの専門外。基礎から勉強しはじめたことをきっかけにその奥深さを知った」と当時を振り返る。平成バブル崩壊後、とくに失われた30年と呼ばれた期間は「近代建築の3大要素である鉄・コンクリート・ガラスが過去のものどさ

タナチャー社長

田中廣さん



れた風潮もあった」。その結果、「ガラスメーカーも苦労され、世間からもガラスそのものへの注目度も下がってしまった」と指摘する。

「業界関係者であるにもかかわらずガラス

の素材の素晴らしさを知らない人がいるかもしれない」と危機感を持った。

素材としての優れた性格や幾多の技術革新を経て、身近な存在になったガラス。「業界関係者のみならずガラスに関心を持っている一般の人々にあらためて周知したい」という思いが募った。そこで、誰もが手にとってガラスのことが一気通貫で分かる本の発行を決意した。

執筆に当たり、記念誌に掲載した内容を基に、工法や業界の最新動向を反映し、バージョンアップした。

本書は、「ガラスは固体か？」の問いかけから始まり、5000年におよぶガラスの歴史を技術史・経済史の要素も交えて紹介している。有史以前にさかのぼりガラスと人類の出会いから始まり、中世から近世にかけて工芸品・美術品として発展を遂げた歴史の経緯をまとめた。近世から現代にかけては、産業革命を契機に安価・大量生産が実現したことで一般社会に浸透していった経過も記されている。

最終章では環境性能の向上や防災、スマートシティーへの対応などガラスの未来を描き出している。

「工芸品としてのガラスに興味がある方は古代から中世にかけて、建材に興味がある方は近現代部分から読み進めてもらうなど、読者によって面白さが変わる」とも。

中国を始め、「後発の優位性」により高機能商品を得られるようになった一方で、欧米を中心に先進国では環境・防災・健康・ITなどの観点から高機能ガラスのニーズがより一層、高まっている。さらに、5G対応のため電波を送受信できるガラス・アンテナや通常の窓でも太陽光発電が可能な高透過ガラスなど新技術の開発も進む。

「古代から技術革新を重ねてきたが現在も革新は続いている。長い歴史と業界のたゆまぬ努力の成果が最新のガラスに結実している」と指摘する。

例えば、一般的な板ガラスに用いられているフロートガラス製法は、59年にピルキントン・ブラザーズ社により確立したが、収益化まで20年の時間を要した。

「今後は中世や古代の考え方を取り入れることで、新しい生産の在り方も生まれるのではないかとガラスの新たな地平を見据える。



『ガラスの歴史
輝く物質のワンダーランドへの誘い』

丸善プラネット
1,800円+税

